



TITLE:

# ＜一冊の本シリーズ 5＞荘子と「 両行」を生きる

AUTHOR(S):

やまだ, ようこ

---

CITATION:

やまだ, ようこ. ＜一冊の本シリーズ 5＞荘子と「両行」を生きる. 静脩  
2007, 43(3-4): 7-8

ISSUE DATE:

2007-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/39322>

RIGHT:

## &lt;一冊の本シリーズ 5&gt;

# 莊子と「<sup>りょうこう</sup>兩行」を生きる

京都大学大学院教育学研究科教授 やまだ ようこ

彼らにとって人生とは、そのまま理想につながる直線的なものではなく、遠まわりし、後ずさりし、傾き、また覆える曲線的なものであった。……そこではもはや、人間が「喪<sup>うしな</sup>う」ことなしには「得る」ことが考えられず、「亡びる」ことなしには「存<sup>ながら</sup>える」ことが考えられなかった。「死ぬ」ことを考えることなしには「生きる」ことが考えられず、「無い」ことを考えることなしには「有る」ことが考えられなかった。彼らは人間と人間の歴史を包む自然の悠久さに憧憬した。進むことのいさぎよさよりも退くことの強<sup>じん</sup>韌<sup>かつ</sup>さに刮目した。彼らの否定と逆説の哲学が、そこから成立するのである。

(福永光司『莊子 内篇』朝日新聞社 解説p.9)

私は子どものころから花札ゲームをするとき、「フケ」という役が好きだった。「フケ」というのは、点数の多い札を集める「獲得」「成功」路線の逆を行って、みんなが欲しがる点数の多い札をひたすら捨てつづけて減点し、最後に20点以下でゲームが終了したときには、一気に「逆転」して優勝するという例外的な役である。

子どものときには、正道に反して、人の逆を行く天邪鬼を好むものだが、大人になるにつれて、それは確率的にたいへん割の合わない話だということがわかってくる。それでもまだ、40代の半ばになっても、友人から、私がめざしている研究方向をさして、「この人は、減点札を集めていけば、いつかは必ず逆転すると本当に信じているみたいだよ」と笑われた。

幸いにして世の中のほうが変わってしまって、ひとり孤独に逆方向めざして出発したマイナーな研究路線が、現在では必ずしもそうではなく

なり、光をあびるようになったのだから、時流などというものはわからない。

子どものころから『莊子』を読んでいたわけではないが、彼の思想は青年時代から私の生き方にぴったりはまり、血肉になっただけではなく、『莊子』の危ない毒にもすっかりはまってしまった。

私の手元にあるのは、福永光司先生が訳された『莊子 内篇』(初版、1966年刊、朝日新聞社)である。福永先生に直接教えを受けたことはなく、門外漢の自由さも手伝って、私は自分流に勝手に読んできた。

福永訳の魅力のひとつは、簡潔な原文と対照され「<sup>りょうこう</sup>兩行」する、流麗な日本語の書き下し文の美しさにある。「兩行」とは莊子のことばで、「二つながら行われていくこと、矛盾の同時存在」である。このことばは、今では私が専門とする生涯発達心理学の理論モデルの中核となり、最近のアメリカの学術誌“*Culture & Psychology*”などにも論文を発表して、海外の研究者にも注目されるようになった。

福永先生の訳は、原文を日本語に置き換えるのではなく、訳自体が原文と拮抗し「兩行」するものである。素人ながらに「ここまで言っても、いいものだろうか」と思うような、自在な訳もあるが、それだけご自身が身をもって入れ込んでおられたのだろう。

私がおおきな影響を受けたのは、ルビの「兩行」的な使い方である。「逍遙遊(しょうようゆう)」に、「逍遙<sup>こころまかせ</sup>の遊<sup>あそ</sup>び」とルビがふられると、その意味が何の注釈もなく、胸に深くすんとおちて、魅力的に響いてくる。また漢字に和文のルビをつけることで、「二言語」を併用した多声的な

意味がうまれる。

私は同じような手法で、日本語に英語のルビをふる用法を専門用語として活用してきた。たとえば「現場」と表記すると、日本語のもつ、今ここでまさに起こるという意味の「現場(げんば)」と、原野という意味の「フィールド」、両方の意味を共鳴的に複合できる。専門用語も、表層を流れるカタカナ語のオンパレードにしたい、しかし日本語だけでは不十分というときにも、ルビが役に立つ。それで「生成継承性」<sup>ジェネラティヴィティ</sup>「省察性」<sup>リフレクシビティ</sup>など、ルビ付きの訳を試みてきた。

今、私は『喪失の語りー生成のライフストーリー』(新曜社)という本を刊行するために、あとがきを書いている。そこであらためて『莊子』を読んでみて、その解釈はさまざまな可能性にひらかれていると感じる。この本では、「喪失」を「生成」と両行的にむすびつけようとしているが、私のめざすものが単なる「逆転」ではなく、「両行」なのだということが、ますますはっきりしてきた。

莊子は、自己を「喪った」ときの姿を、最愛の妻を「喪った」ときの姿になぞらえている。外から見れば妻を喪ったときのように生氣なくひから

びているようでも、その当事者にとっては自由に空を舞いながら胡蝶の夢を見ているのかも知れない。また「喪う」ことによって、自己はかつての自己ではなくなり、新しい自己に生まれ変わるのである。次のような私流の訳も、きっと福永先生は大目に見てくださるにちがいない。

「喪<sup>うしな</sup>う」ということばが胎んでいる矛盾を含みこんだ多重の意味、その多声の響きを我が身を痛めながら覚知していくプロセスが、生きるということかもしれない。

シキは、机にもたれて坐り、天を仰いでふうと息をついています。そのうつろなさまは、妻の喪<sup>も</sup>にふくしているかのようです。

シユウは、問いかけました。「いかがされましたか。体は枯れ木のように、心は死に灰のようではありませんか。今、机にもたれている者は、昔、机にもたれていた者とは、<sup>ことな</sup>非っております。」

シキは、言いました。「よい問いですね。今、私は我を喪<sup>うしな</sup>っていました。あなたはこれを知っていますか。」

(『莊子 内篇』齊物論篇より やまだ訳。)

## (桂)図書館棟寄付の無期延期に伴いバックナンバーセンター(BNC)及び理工学系外国雑誌センター移設計画も白紙に

2006年11月20日に京都大学ホームページのニュースリリースで報じられたとおり、京都大学(桂)図書館棟の建設が寄付者の意向により無期延期になりました。

それに伴い(桂)図書館棟内に自動化書庫を設置して附属図書館BNCの自然科学系外国雑誌の一部及び理工学系外国雑誌センターを移設する計画も白紙に戻りました。

なお、工学研究科・情報学研究科の合同図書館の性格も兼ねる桂キャンパスの拠点図書館建設は桂キャンパスの整備計画に明記されており、京都大学にとって重要な懸案事項でありますから建設に向けて学内で継続して新たな方策を検討することになっております。図書館機構としても推移を見守り関係部局と協議して対応していく予定です。

**バックナンバーセンター** : <http://www3.kulib.kyoto-u.ac.jp/BNC/framebnc.html>

**理工学系外国雑誌センター** : <http://www3.kulib.kyoto-u.ac.jp/etc/gaikoku-j/gaikoku.html>